

「声の占領」にみる帝国のアイコン

—日本占領期ジャワにおけるラジオ放送管理政策

小 林 和 夫

1. はじめに

本稿の目的は、日本占領期ジャワにおける「声の占領」にみる帝国のアイコンを、ラジオ放送政策を事例として、読み解くことにある。

近年、「外地」における日本帝国の文化性や表象性についての研究が多くみられるようになった。極東アジアでもっとも早く写真技術を西洋から習得し文明化を進めていた日本は、台湾、朝鮮、清（満州）などの「外地」の様子を写真にさかんに撮影した。そして、その写真は、錦絵、石版画、絵はがきなどの媒体に転用された（朴 2016 :3）。写真技術は帝国の表象化のための科学的利器として重要な役割を担ったのである。

この意味で、「外地」にみる帝国の表象は、写真・映画をはじめとする映像技術によって「内地」にもたらされたといえる。「内地」の国民は、「外地」から送られてくる写真に帝国の拡大をたしかに看取した。「外地」に映る帝国の表象は、「外地」と「内地」の地理的範囲を超えて、大東亜共栄圏構想がたしかに進展しているという実体的な感覚を帝国「臣民」のなかに醸成していった。換言すれば、帝国の表象は、近代的学知の動員による文化的装置の実装によって前景化したのである。

しかし、帝国の表象とは映像や意匠などの可視的な媒体によってのみ、とらえられるものなのだろうか。写真技術や映画が帝国の表象をつくりだした

とすれば、続いて普及した近代的利器であるラジオから流れた不可視の「声」による占領にも、帝国は「表象」されていたはずである。

ラジオが太平洋戦争の遂行にはたした役割やプロパガンダの諸形態については多くの研究がある（竹山 1994, 2002, 2005; 山本 2002; 貴志 2006; 佐藤 2006; 井川 2012; 渡辺 2014; 秋山 2018 ほか）。また、ラジオ・トウキョウとよばれた日本の対外放送の全体像も明らかになっている（北山 1987, 1988ab）。とくに、ラジオ・トウキョウの東南アジア向け放送については、アメリカ戦略情報局がジャワ島とバリ島で傍受したものをインデックス別にまとめた報告書をだしている（OSS: 1945）。

しかし、帝国日本の統治下にあった東南アジアの人びとが、そもそも日本占領期以前から希少であったラジオにどのように反応したのか、また、ラジオをどのように聴いたのかについてはほとんど論じられてこなかった¹。日本占領期のインドネシアに関する研究は、管見では、田子内によるラジオ放送にみる音楽文化についての研究以外は皆無に等しい²。

このため、本稿では、冒頭に示したように日本占領期ジャワにおけるラジオ放送政策に焦点をあてながら、ジャワ軍政による「声の占領」のなかに帝国のアイコンを読み解くことをこころみる。

本稿の構成を示す。2では、蘭領東インド時代におけるラジオ放送の歴史を略述する。3では、ジャワ軍政による放送管理政策をあとづける。4では、ジャワにおけるラジオ放送番組の編成方針と内容の概要を示す。5では、ラジオ塔の建設がジャワの人びとと社会にいかなる影響を与えたのかを考察する。6では、本稿のまとめと課題を示す。

2. 蘭領東インドにおけるラジオ放送の開始

1927年3月に、オランダは世界初の植民地放送を開始した（佐藤 1974: 31）。工業都市アイントハーフェンに拠点を置くフィリップス白熱電球会社による、西部ジャワ最大の都市バンドゥンに向けた放送がそれであった。同

時に、この放送はインドネシアにおけるはじめてのラジオ放送となった。同年6月、同社はアムステルダムにフィリップス無線放送会社を設立し、オランダ本国とインドネシアの間で定期放送を開始した。外務省が発行していた『国際時報』は、これを「アムステルダム東印度定期無線放送」との標題で報じている（『国際時報』第2巻18号）。

1930年頃から、インドネシアではクラブ組織のアマチュア諸団体³が都市で放送を始めていたが、1932年6月に蘭領東インド放送会社（NIROM）がバタビアに設立され、1934年から本放送を開始して放送の組織化がはかられた（日本放送教会1943:309-310）。

表1は、1935年から1940年にかけての蘭領東インドにおけるラジオ受信機の使用許可台数である。1930年の統計による蘭領東インドの全人口60,727,233人を基本とした、1940年のラジオ保有台数の人口割合はわずか0.17%に過ぎない（田子内2006:154）。

表1：ラジオ受信機使用許可台数（1935-1940年）

年	ヨーロッパ人	インドネシア人	その他アジア人	合計
1935	19,020	4,411	4,135	27,566
1936	25,681	7,259	6,088	39,028
1937	32,756	12,238	9,468	54,462
1938	39,919	18,173	12,817	70,909
1939	45,039	25,608	16,863	87,510
1940	50,054	31,539	20,275	101,868

出典：Indisch Verslag 1941, p.461 より筆者が一部改変して作成。

『ラヂオ年鑑 昭和十八年版』は、当時の蘭領東インドにおけるラジオ放送の状況を以下のように紹介している。

住民の人口数の比例を考慮すれば、インドネシア（ママ）人の受信機所有数の割合はヨーロッパ人に比し遥かに低位にある。貧困なインドネシア人は高級受信機を購入し得ず、安価良質の日本製品を求めるが、政

府の許可する所とならず、一方オランダ人は高級短波受信機を所有してヨーロッパ各地の放送を聴取して楽しむことが出来たのである。ここにも文化享受の不均等が見られる。(日本放送協会 1943: 312)

田子内は、1940 年当時のラジオ受信機 (Tosco PHILIPS) の価格が 119 ギルダーであり、インドネシア人の平均月給が 30 ギルダー程度であったことから、大多数のインドネシア人にとってラジオ受信機がきわめて高価なものであったと述べている (田子内 2006: 154)。ラジオを所有しているインドネシア人はきわめて少なかったのである。

吉見俊哉がいうように、19 世紀以降、電話・ラジオ・蓄音機という「声」は産業化されブルジョア的記号としその姿を現した (吉見 1995)。しかし、上述の「文化享受の不均等」は、オランダ—インドネシアの支配—被支配という権力関係がつくりだしたものにほかならない。インドネシアにおけるラジオは、吉見のいうブルジョア的記号としてだけでなく、統治国—被統治国という支配関係の権力的記号としても流通していたといえる。

もちろん、ラジオ受信機の絶対数とラジオ放送の聴取経験者の数は必ずしも一致するとはいえない。なぜなら、ラジオ受信機を所有する王家や一部の富裕層が所有するラジオに多くの人びとが集り、短時間であっても放送を聴いていた可能性があるからである (田子内 2006: 154)。また、ラジオを販売していた店舗から、ラジオ放送が流れていた可能性も考えられる。しかし、ラジオ受信機の所有率が蘭領東インド全住民のわずか 1% にも遠く及ばなかったことから考えれば、少なくとも日常的に住民たちがラジオ放送を自由に聴取できたとは考えにくい。ラジオは最新のメディアでありながら、それを享受できるインドネシア人はきわめて限定されていたのである。とくに、都市にくらべて産業が未発達で、近代的な消費文化が生活のなかに入りこんでいたとはいえない地方や農村地域ではなおさらであろう。インドネシアは、このような状況のなかで日本占領期を迎えるのである。

図1：日本占領期初期バタビアのラジオ相談所⁴の広告



出典：Kantor Penjiaran Partikoelir, n/d から筆者転載。

3. 日本軍政による放送管理

3-1. 南方軍総司令部および陸軍省の対応

南方軍総司令部は、1942年3月のジャワ島上陸前から占領統治におけるラジオの重要性を認識していた。このことを如実に示しているのが、ジャワ島上陸の際の謀略放送作戦の実施報告書における以下の記述である。

蘭印ハ各国ノ例ニ倣ヒ対内宣伝上、極メテ「ラヂオ」放送ヲ重視シ「ニュース」ニ対スル統制検閲ハ極メテ嚴重ナリキ。其ノ他政府軍当局ノ公示、発表等ハ迅速ニ「ラヂオ」ヲ以テ行フ外、動員、召集、隷下軍ニ対スル命令等モ、略隠語等ヲ以テ命令公示セルコトアリ。（南方軍総司令部1942：2072）

この言説から、南方軍総司令部が、オランダ統治下のインドネシア（以下、蘭領東インド）では、政府の公示・発表だけでなく、動員や召集もラジオによって行なったことを踏襲し、ラジオを軍政のために十全に利用しようとしていたことがうかがえる。

南方各占領地で軍政が開始されると、陸軍省は、1942年5月に「南方占領地放送暫定処理要領」によって、南方占領地における放送管理局の設置をいち早く指令し、放送の一元的・集中的な管理をはかった（整備局交通課1942）。続いて同年7月に「南方占領地放送建設要領」によって、南方占領地における放送管理の方針や放送局の建設計画⁵を正式に決定した（陸軍省報道部1942）。

ジャワ軍政は、南方軍総司令部の「南方占領地放送建設要領」を受けて、1942年9月24日に「治政秘第489号」で放送管理局を設置した。1943年1月8日にその一部が改正されたが、ジャワでは、放送管理局がジャカルタ、バンドゥン、スラバヤ、マラン、ジョグジャカルタ、ソロ、スマランの7地方に設置された⁶。「放送管理局規程」によれば、業務の大きな柱はジャワ内外に向けた放送実施と、ラジオ受信機の普及に関する指導及統制であった（爪哇軍政監部1944）。しかし、後者については、ラジオ受信機の普及に関する指導よりも明らかに統制に重点が置かれた。戦前にJOBKのアナウンサーを務め、開戦後、ジャワ放送管理局放送部長を務めた島浦精二⁷は、戦争とラジオ放送について以下のように述べている。

戦局が愈々決戦段階に入るとともに、電波による思想戦も愈々酷である。我々の頭の上には、昼夜を別たず、敵味方の電波が、1秒間に地球を7週半廻る速さと、エヴェレストを越え太平洋を渡る強さを以て、縦横に飛び交っている。若し電波に色があって、我々の眼に見える事が出来るならば、それは、どんなに美しくまた恐ろしい景観であろうか。（島浦1945:75、下線は筆者）

島浦がいう電波の「美しくまた恐ろしい景観」とは、味方による放送の潤色と、敵による放送の謀略という対照をなす「電波戦」の過酷さを表現しているといっていよう。そして、ジャワにおける「電波戦」は、まず敵国や外国からの「恐ろしい」電波を徹底して排除することからはじまったので

ある。

3-2. ジャワ軍政における段階的放送管理

ジャワ軍政当局は、ジャワ島上陸から3ヵ月後の1942年6月16日に、布告第21号「ラヂオ取締ニ関スル件」を発令して放送と受信機の管理を開始した（治官報第1号：7，KAN PO No.1: 3）。同布告の目的は、防諜のために外国からのラジオ放送の聴取を禁止することであった（第1条）。

ジャワ軍政当局は、インドネシアにおける正規届出済のラジオ聴取者は約11万人であり、その聴取者のほとんどが感度のすぐれた高級受信機をもち、外国からの海外向け放送⁸の受信がきわめて容易とみていた（ジャワ新聞社1944: 171）。

このため、布告21号によって主要都市は同年6月30日、そのほかの地域は同年7月31日までにすべてのラジオ受信機所有者に登録を義務づけたのである。具体的には、ラジオ受信機の所有者は、登録時に受信可能な周波数を制限し、外国放送を受信できない加工⁹を受けることが示されている（第1条）。

同布告では、発令からわずか2週間から1ヶ月の短期間にラジオ受信機の登録を義務づけて（第2条）おり、ジャワ軍政にとって海外からのラジオ放送の電波管理が喫緊の課題であったことがうかがえる。また、登録者は、家の入り口などの見やすい場所に、軍政当局から交付された登録証を掲示することが義務けられた（第4条）。これらの規定に背いた場合や、周波数の加工を元に戻すなどの行為は、軍律で厳罰に処されることがうたわれた（第6条）。

ラジオ受信機の管理は、すでにラジオを所有している者だけにとどまらなかった。たとえば、中部ジャワのスラカルタ（ソロ）では、ラジオ受信機の販売業者と修理業者に、6月15日現在のラジオ受信機と真空管の在庫量、6月15日から7月15日までの販売済のラジオ受信機と真空管の数、同期間のラジオ受信機の修理数、在庫のラジオ受信機と真空管の型式・型番、さらに、

ラジオ受信機と真空管の販売者・購入者の名前・住所の情報を告知することが徹底された (KAN PO No.1: 31)。

「ラヂオ取締ニ関スル件」の発令以降、ジャワ各地でラジオの取締は強化されていった。ここでは、いくつかの例をみてみよう。

西部ジャワの最大の都市バンドゥンでは、1942年9月10日にラジオ取締りに関する告知が出された (KAN PO No.3: 16)。この告知によって、ラジオの販売者、購入者または代理人は、まず郵便局に赴いたあとで、市役所のラジオ登録課で登録する方式に変更された (第一条)。そして、登録時には、いずれも、「販売・購入記録簿」(boekoe ditjatatan djoel-beli) に両者の署名と指紋押捺が求められた (第1条)。また、ラジオを貸し借りする場合も、これらと同じ手続きが必要となった (第2条)。さらに、購入、交換、借用、転居などの理由で、バンドゥン市以外から持ち込まれたラジオについても、新しい付番を記載するために上述のような手続きが義務づけられた。

中部ジャワの宮廷都市・ジョグジャカルタでは、1942年9月8日に「ジョグジャカルタ地域におけるラジオ所有者に関する規定」が出された (KAN PO No.3: 20)。同規定では、ラジオ受信機所有者は登録のほか、修理が必要な場合も侯地事務局ラジオ課から許可を得ることが必要になった。修理についてはさらに細かい規定が設けられ、持ち込まれたラジオ受信機は、侯地事務局で毎週水曜日 11 時まで保管することになった。

東部ジャワ最大の都市スラバヤでは、1942年9月30日に周波数制限の加工を受けたラジオ受信機の再検査の告知がなされた (KAN PO No.5: 17-18)。ラジオ受信機の周波数制限は、既述の布告第 21 号によって所有登録とともに義務づけられたが、加工が不十分で海外からの電波を受信できるもの残存していたため、本告知で再度加工を施すことを求めたものである。

さらに、1942年後半のラジオ受信機の管理実態をみていこう。東部ジャワのマラン州では、1942年11月5日、同州在住のイギリス人、アメリカ人、オランダ人のラジオ受信機の没収が告知された。また、軍人、民間人問わず、刑務所収容者は、本人だけでなく家族が所有するラジオ受信機も没収¹⁰され

ることになった（KAN PO No.7: 15）。後述するように、1945 年 6 月の治政令第 27 号「ラヂオ放送受信機警戒の件」によって、特別許可を受けた者以外は、ジャワ全土で一律にラヂオ受信機が没収されることになった。しかし、同州では 1942 年 11 月の段階で一律ではないにせよ、いちはやくラヂオ受信機の没収がはじまっていたことになる。

また、スラカルタでは、1942 年 11 月からラヂオ受信機所有者に、月額 1 ルピアの支援費（uang sokongan）の支払いを義務づけることになった（KAN PO No.8: 25）。支払期日は毎月 15 日とされ、延滞した場合は 0.1 ルピアの罰金が設けられた。

3-3. ジャワ全土におけるさらなる管理強化

1943 年に入ると、ラヂオ受信機の管理はジャワ全土で一律に強化されるようになる。まず、1943 年 3 月 19 日には治監令第 2 号「無線通信機器同部分品取締規則」が出された（治官報第 5 号: 45）。同規則は、いくつかの例外¹¹が設けられたものの、無線通信機器とその部品の製造・修理・譲渡を禁止するものであった¹²。

同規則では、直接的にはラヂオ受信機については言及していないが、無線通信機器の部品として真空管や抵抗が指定されていることから、後のラヂオ受信機の一律管理が予期されているとみるべきであろう。本規則は、ジャワにおけるさらなる防諜の必要性から、電波管理への厳格な対応のあらわれといえる。

1943 年 6 月 11 日には、治政令第 18 号「ラヂオ取締令」が出された（治官報第 8 号: 1）。「ラヂオ取締令」は、ラヂオ受信機の登録と周波数の加工（第 1 条）については前年の「ラヂオ取締ニ関スル件」の内容とほぼ同一であるが、違反者に対する 3 ヶ月以下の監禁または 500 円以下の科料という罰則が関連法令ではじめて明記された（第 2 条）。そして、「ラヂオ取締令」を実効化するために、同年 6 月 12 日の軍政監告示第 8 号によって、全ジャワのラヂオ受信機所有者は、一律に 6 月 30 日までにラヂオごとに州県、候地事務局、

特別市に届出が表 2 に示した事項の登録が義務化された¹³。

1944 年 1 月 31 日には、軍政監告示第 5 号によって、同年 2 月末まで販売品をふくむラジオ受信機の譲渡、設置場所の変更が禁止された（治官報第 15 号:20）。ラジオ受信機の譲渡や設置場所の変更を 1 ヶ月間禁止することによって、ラジオ受信機の所有状況の実態を調査する目的があったと考えられる。

以下は、ジャワ軍政当局者として防諜活動を主導した 1 人である憲兵中佐・池山靖の見解である¹⁴。

電波は第四軍中でも花形だ。怪電波の製造や、悪性デマの攻撃は得意中の得意の手である。而も ジャワでは高級ラジオが発達し、少し改造を加へれば世界のニュースが聴取し得る。厳重な取締りにも拘らず、犯罪があとを絶たない。適性分子に至つては押入れの床下や屋根裏にラジオを隠匿し、放送内容を印刷配布しているものもある。（池山 1944: 58-59 下線は筆者）

既述のように、ジャワ軍政ではじめてのラジオ受信機の管理法「ラヂオ取締ニ関スル件」は、外国放送を受信できないようにするための法制であった。池山の見解は、1942 年の「ラヂオ取締令」から 1944 年の「ラヂオ取締ニ関スル件」まで、ジャワ軍政当局が一貫して外国放送を警戒していたことを傍証している。

ジャワ軍政におけるラジオ受信機管理の最終的な法令は、1945 年 6 月 13 日発令の治政令第 27 号「ラジオ放送受信機警戒の件」（KAN PO No.69: 9-10）である。全 9 条からなる「ラジオ放送受信機警戒の件」は、1943 年の「ラヂオ取締令」を全面的に改訂するものであった。たとえば、放送管理局長の許可がない場合、ラジオ受信機の所有を禁止することがはじめてうたわれた（第 1 条）。また、軍政監の命によって所有する、または、譲渡されたラジオ受信機を没収できることも明記された（第 2 条）。

罰則もさらに強化され、第 1 条から第 4 条に対する違反に対しては、最高

で懲役1年又は1000ルピアの罰金、第5条から6条に対する違反には最高で懲役6ヶ月又は500ルピアの罰金が科せられることになった。

表2はラジオ関連政治犯の懲役年数を示したものである¹⁵。氏名から全員が西洋人と判断できるが、判決は、「ラジオ放送受信機警戒の件」で定められている懲役年の最高刑期から逸脱し、1年3ヶ月から7年となっている。とくに、判決機関によって懲役年数が異なり、地方法院では1年3ヶ月から2年であるが、軍律会議ではいずれも7年と重い。同じリストに記載されているほかの「犯罪」をみても、「造言蜚語」（omong kosong）で2年（地方法院）から3年（軍律会議）、集合・結社（kumpulan）で5年（軍律会議）から10年（軍律会議）であったことから、ラジオ「犯罪」に対して軍政当局が厳しい姿勢を貫いていたことがわかる。

表2：ラジオ関連政治犯の懲役年数

番号	氏名	判決	判決機関
17	A	2年	地方法院
18	B	1年3ヶ月	地方法院
19	C	1年3ヶ月	地方法院
20	D	7年	軍律会議
24	E	1年	地方法院
25	F	7年	軍律会議

出典：オランダ国立戦争・ホロコースト・ジェノサイド資料館（NIOD）所蔵 Indische Collectie 400-4626 から、筆者が一部改変して作成。

このように、従前にはない厳しい罰則をもったラジオ受信機の管理令が発令され、また、実際には法令上の最高刑期を上回る量刑がだされていたことから、敗戦が濃厚となっていた戦局のなかで、ジャワの防諜を少しでも保持しようとする軍政当局の強い意図がうかがえる。

以上みてきたように、ジャワ軍政による「声」の占領は、まずは法令によってラジオ受信機の段階的管理というかたちで行なわれたのである。

4. ジャワにおける放送番組の編成方針と内容

4-1. 番組の編成方針

放送番組の編成方針は、「現地人をして軍政の向ふところを知らしむるは固より放送番組の編成方針は大東亜戦争の意義目的を認識せしめ、聖戦完遂、大東亜共栄圏確立に奮起協力せしむる」(ジャワ新聞社 1944: 172) ことに置かれた。この方針にしたがって、番組は報道、教養、慰安の3つの内容が編成された。

表3は、1944年4月1日におけるジャワ島内の放送番組である。これを見ると、ジャワ軍政当局の方針にそって、上述の3つの内容が番組として実際に編成されていることがわかる。眼を引くのは、報道番組についてはマライ(インドネシア)語だけでなく、ジャワ語、スندا語と3言語で放送されていることである。くわえて、けっして多くはないが、婦人や子ども向けの番組も政策されるなど、多様な聴取者に一定程度配慮されていることがうかがえる。

4-2. 番組内容

表4は、ジャワにおけるラジオ放送番組の報道、教養、慰安の内容をまとめたものである。蘭領東インド時代の NIROM のバタビア放送の番組と比較すれば、同時代のインドネシア人の放送聴取者の絶対的な少なさが番組編成に反映していたとしても、日本占領期の方が明らかに番組内容は充実しているといつてよいだろう。その一方で、番組内容の説明では、日本や枢軸国の文化中心主義的な表現が際立っている。とくに「教養」については、学校放送の「講話」で、「大東亜戦争の意義、大東亜共栄圏確立の意義、指導国日本への知識、米英蘭の罪惡史等」が放送されるなど、皇国史観の鼓吹が目立つ。しかし、「長期戦下に於ては健全なる娯樂を与へて民心を倦まざらしめ」るために、「子供の時間」ではインドネシア人の音楽的才能が先天的に優れていると認め、これを番組編成に反映させていた。

スラバヤ放送局長の森本勉は、1943年12月23日に行なわれた教師たちのとの会合の席上、児童教育に対するラジオの重要性を語っている（Poestaka Radio 1944.1.16-1.31: 8-9.）。また、「慰安」でも、音楽のジャンルの豊富さを南方圏でもっとも恵まれていると評価し、主要放送局は専属の楽団を持って図2のように定時にガムランの生演奏を放送している。

ここでひとつの疑問が生じる。それは、既述のラジオ受信機の管理強化と、ここで示した放送番組の充実さとの乖離である。ラジオ受信機は段階的に管理が強化され、最終的に、1945年6月には事実上ラジオ受信機はほぼすべて没収されていた。であるならば、ジャワの人びとは、どのようにしてラジオ放送を聴取したのだろうか。

図2：ガムラン演奏のラジオ放送

出典：『ジャワ・バル』1943年2月15日号，p.17より転載。



表 3: ジャワ島内放送番組（ジャカルタ放送局）1944 年 4 月 1 日現在

第一放送番組（115.38M）		第二放送番組（134.23M）	
07:30	放送開始, 日本語, 音盤	21:20	報道, 解説
07:40	本日の番組予告	21:30	マライ語報道
08:00	ジャワ語報道	21:45	演芸
08:30	ラジオ体操	22:00	時報, ジャワ語報道
08:45	西洋音楽, 音盤	22:30	スンダ語報道
	休止	23:00	音楽の時間
09:00	主として婦人向講演又は音楽演奏	24:00	演芸
09:15	コロンチヨン及ガメラン演奏	24:25	ジャカルタ特別市告示
09:45	時報, ラジオ体操, 日本語報道		明日の番組予告
11:00	管弦楽	24:30	休止
11:30	マライ語報道	第二放送番組（134.23M）	
13:00	音楽の時間	18:00	時報, 小国民の時間
	休止		新聞（時々, ジャカルタ局の告示, 其の他あり）
13:30	日本語, 音盤		音楽
14:00	子供の新聞（ヤサシイ日本語）	18:25	番組予告
14:15	子供の時間	18:30	演芸の時間
15:30	マライ語報道	18:55	国民合唱
17:45	ジャワ語報道	19:00	時報, 報道
18:00	スンダ語報道		引続き演芸の時間
18:05	音楽	21:00	時報, 報道
18:30	ジャカルタ特別市告示		引続き演芸の時間
18:45	音楽の時間	22:00	時報, 報道
19:00	歌の稽古（月水金土）	22:30	休止
19:15	コロンチヨン演奏（火木日）		
19:30	管弦楽		
19:40	講演		
19:55			
20:30			昭和十九年四月一日改正
21:00			

出典：『ジャワ年鑑』 p.175 より筆者が一部改変して作成。

表 4：ジャワにおける放送番組の内容

編成方針	内容
報道	<p>△軍政布告その他当局公示事項 軍政下の各人の生活を規律すべき政令その他当局発表を周知徹底せしむるため、毎日4回約30分マライ語を以て反復放送している。</p> <p>△報道および報道解説 日本語 毎日1回30分 簡易なる日本語（現地向人向）毎日1回5分 マライ語 毎日3回45分 ジャワ語 毎日2回30分 スンダ語 毎日2回45分 報道実施に当つては単なる事実の報道に止めず、多分の指導性持たしむると共に、また随時報道解説を行つて、枢軸必勝の信念を注入し、新しきジャワ建設への協力を指導している。</p> <p>△時報 毎日3回8時13時22時 この外実況中継放送或は録音放送を随時実施。</p>
教養	<p>△講演、講座 原則として毎日午前、午後2回講演の時間を設けて日本紹介、回教に就て、戦時下の家庭生活に就てなど放送し、また日本の祝祭日、記念日等にはその日に因む講演を当路者に依頼し、マライ語訳と共に放送している。</p> <p>△日本語の普及 日本語普及の急務なることは敢て説明の要なく、この主旨に沿ふ放送として次の3種を設定してある。</p> <p>(1) 日本語講座 講本を使用し毎週月水金の3回各30分宛 (2) 現地人のための日本語報道 毎週1回、5分間、特に簡易な日本語で編集 (3) 日本唱歌指導 毎週4回、各10分宛</p> <p>△学校放送と子供の時間 (1) 学校放送 毎月第1、第3木曜日、各30分、講話（大東亜戦争の意義、大東亜共栄圏確立の意義、指導国日本への知識、米英蘭の罪惡史等）と唱歌または童話。講本は軍政監部内務部文教局にて制作。</p> <p>(2) 子供の時間 平日1回。日曜、祭日午前、午後各1回。<u>先天的に優れたる原住民の音楽的才能</u>を利用して、日本の童謡、唱歌等を教へ、童心に新生の喜びと希望を与えつつ、日本への尊敬、東亜一体感の涵養に努めている。</p>

慰安	<p>戦時下に於ける慰安の必要性に関しては多言を要せざるところ、特に長期戦下に於ては健全なる娯樂を与へて民心を倦まざらしめ、又娯樂を通じて正しい情操を養ふこと肝要であるが、此の意味において<u>伝統的芸術たるガメラ音楽各種ワヤン等を有し、又新しき形式たるコロチヨン音楽を有するジャワは南方圏の各地に比して最も恵まれたる状態にある。</u>ガメラの伝統を保持助成し、コロチヨンのややもすれば包含する米国のジャズの影響を排して之を健全なる音楽へ指導しつつ之等を以て民衆に慰安を与ふること亦放送に課せられた使命の1つである。</p> <p>島内各主要放送局は専属の楽団をもち、毎日定時に演奏すると共に適宜民間の各音楽団体を使つて毎日の番組を作っている。なほ、之等ジャワ音楽の外に日本音楽と西洋音楽あり、日本音楽については前記の如く主として児童、青年に平易な日本歌曲を指導することによつて漸次日本固有の音楽を教へ西洋音楽に就ては敵国乃至敵性国作家の作品を排して、日本及枢軸国作家の作品に限定し、民衆の芸術的教養に資している。但し現在之等各種音楽放送の実施に当つて主として音盤を使用しているのは諸種の事情から止むを得ない所である。音楽以外の演芸に関しては、前記各種ワヤン以外に見るべきものなく、例へば放送劇、物語の如き形式はあるが、目下のところ台本、演出共に甚だしく未熟で素人の域を脱せず、まづ作者及演出者の指導養成を必要とする。なほ、慰安放送一般に関しては、啓民文化指導所と緊密なる連繫を保っている。</p>
----	--

出典：『ジャワ年鑑』 pp.172-173 より、筆者が一部改変し作成。下線は筆者。

5. 「うたを歌う木」の出現—娯樂と「音の風景」の誕生

5-1. 希少な娯樂としてのラジオ放送

1942年7月に中部ジャワの都市スマランの宣伝班は、同市内6箇所にラジオ受信機を設置して、住民向けに17時半から24時までニュースや音楽の放送を開始したことを告知した（KAN PO No.1: 32-33）。ラジオが設置された6箇所のうちの1つは、同宣伝部の事務所前であった。宣伝班は、この事務所前のゴムの木にスピーカーを括りつけ、音声を拡声して住民にラジオ放送やレコードを聞かせた。これが、後のラジオ塔建設の端緒となったと考えられる。では、木に括りつけられたラジオに、住民たちはどのように反応したのだろうか。『うなばら』紙の記事からみてみよう。

宣伝班の事務所前には、12名の兵隊が手をつないでやっと取巻けるほどのゴムの大樹がある。その前に掲示板を掲げたので、市民たちは毎日詰めかけて読んでいるが、こんどゴムの木の幹の間にラウドスピーカーを据付けた。そして、ラジオとレコードを木の中から聞かせたところ、市民たちはラウドスピーカーが見えないので「木がうたを歌ふ」と大騒ぎ。噂を聞いて我も我もと集ってきたので、今ではスマラン市の名所の1つになってしまった。露店商人も大繁盛で、夜になると鬱蒼と茂ったゴムの大樹の下に胡坐をかいた群集は南十字星を仰ぎながら放送に聞き惚れている。（『うなばら』1942.7.14、下線は筆者）

スマラン市の住民たちの、木に括られたスピーカーから流れてくるラジオやレコードの音に対する驚愕は、地方や農村でラジオがいかに希少であったのかを如実に物語っている。スマラン市は中部ジャワ最大の都市であり、宣伝班の事務所が同市の中心部にあったことからすると、この記事で紹介されている「都市」近隣の住民でさえもラジオやレコードの音を「木がうたを歌う」との表現は、ジャワにおけるラジオの希少性をあらためて浮き彫りにしている。

次に、スマランでの「うたを歌う木」の反響を受けて、バタビアでも同じところみがなされたことを報じる同紙の記事をみてみよう。

スマランに街頭ラジオが出現して『うたを歌ふ木』と原住民を驚かしていると思ったら、こんどはバタビアにも現れることになった16。これは市指導部の肝入りで市内40箇所に据付けられるもので、場所もラジオ購入の余力の無いカンボンを中心に選び電波を通じて流れ出す軍の布告や人員募集、戦況説明や解説をこれらの住民にも徹底させる一方、旧蘭印時代にただ圧政下に喘ぐばかりで何等の娯楽も与えられなかった人たちに健全な慰安をも与えようといふのである。（『うなばら』1942.7.15 下線は筆者）

バタビアの記事で注目されるのは、「うたを歌う木」の設置の目的が、布告や人員募集など、軍政の告知の手段としてだけでなく、住民への娯楽としても位置づけられていることである。軍政の告知やプロパガンダという「権力の声」と、住民のための「娯楽の声」という位相がまったく異なる「声」がラジオから流れることになったのである。

スマランからはじまった「うたを歌う木」の反響は、ジャワ全土でのラジオ塔建設へとつながり、1944年2月にその数は約1,500台にまで拡大した(ジャワ新聞社 1944: 174)。

図 3：ジャワのラジオ塔



出典：日本映画社ジャカルタ支社、1945, “Kesehatan Badan” (『身体健康』), The Netherlands Institution for Sound and Vision 所蔵 (Task ID No.119685) から、筆者がキャプチャして転載。

ジャワの軍政当局はラジオ塔の建設意義を以下のようにみていた。

旧蘭領時代、ラジオは単なる有産階級の娯楽施設に過ぎなかったが我が軍の統治下に入るや直に軍政布告其の他にラジオを利用すると共に之が一般聴取を企図してラジオ塔の建設、学校放送の開設などを行ってきた。(ジャワ新聞社 1944: 174)

既述のように、蘭領東インドにおける 1940 年のラジオ所有率は全人口の 0.17% に過ぎなかった。この数字をインドネシア人に限定してみれば、その比率はさらに小さくなる。したがって、ジャワ軍政当局がラジオを「有産階級の娯楽」と評価することはラジオ受信機の所有台数の実態からみても当然といえる。

では、スマランの「うたを歌う木」が嚆矢と考えられるラジオ塔の設置は、ジャワの住民たちにどのような影響を与えたのだろうか。「戦前・戦中期を通じ外務省きってのインドネシア専門家」（後藤 2009: 5）で、ジャワ軍政に領事待遇で勤務した三好俊吉郎は、以下のように述べている。

占領そうそう時代ではいっさいの慰安娯楽機関が停止されていたので、簡単な宣伝宣撫用の放送も一般住民には当初相当受けたようである。とくに音楽の好きなインドネシア人には、軍歌や哀調的な日本の流行歌はひじょうにも大いに流行した。（三好 2009: 66）

三好が指摘しているように、ラジオ塔建設による「うたを歌う木」の出現は、ジャワ軍政下での数少ない娯楽を住民たちに提供することになった。まして、ラジオは蘭領東インド時代から高価で希少であり、インドネシア人でラジオを所有するものはきわめて少なかった。そして、日本占領期においてはラジオ受信機の厳しい管理が行われた。このようなラジオをめぐる歴史を経て、「うたを歌う木」の元で住民たちはラジオから流れる音に耳を傾けた。ラジオの聴取が娯楽として受容され、広く共有されたのはジャワの人びとにとって歴史的にはじめてのことであつたといつてよいだろう。

三好の「簡単な宣伝宣撫用の放送も一般住民には当初相当受けた」との指摘は、宣伝宣撫というけっして娯楽とはいえない内容も、ラジオにはじめて接する住民、とりわけ、「うたを歌う木」との直裁だが想像力豊かに驚きをもってラジオ塔を表現した住民たちにとっては「娯楽」になりえたことを示唆している。ラジオに接するのが珍しく、娯楽がほとんどなかったジャワの大部

分の住民たちにとっては、軍政の告知やプロパガンダという「権力の声」さえも「娯楽の声」に変質していたのである。

5-2. 「音の風景」の誕生

インドネシア人慣習学者のスポモは、第6回旧慣制度調査委員会（1943年2月5日開催）で、ジャワにおける非識字者の割合を統計では94.5パーセントであると発言している（旧慣制度調査委員会 戸田復刻 第6回：6）。また、朝日新聞から出向し、ジャワ新聞社社長に就任した鈴木文四郎は、ジャワの識字率について「此の五千万ノ大衆ノ中文字ノ読メルモノガ三分トカ四分」と発言している（旧慣制度調査委員会 戸田復刻 第6回：5）。

非識字者が大部分を占める当時のジャワの多くの住民にとって、日常におけるコミュニケーションは、「リテラシー」ではなく文字通りの「オラリティ」の世界、つまり、人と人との肉声の交換のみによって可能であった。ジャワ社会において、「オラリティ」とは、こんにちでいう「リテラシー」の反対称ではなく、唯一無二のコミュニケーションの方法・あり方であったといえる。

ジャワ宣伝班長を務めた町田敬二も、ジャワにおけるラジオの有効性を「放送は元来無色のものである。が、その宣伝媒体としての強度は、新聞、映画その他のマス・メディアに比べて、ジャワでは断然トップに立つ威力を発揮した」と述懐し、その理由をジャワの住民たちの大部分が非識字者であったことに求めている（町田1967:214）。

ふだんのコミュニケーションを成立させた唯一の媒体である肉声は、当時のジャワではその場で機械的に拡声することは日常的に不可能であった。このため、肉声が届く範囲はおのずと限定されていた。オラリティによるコミュニケーションを可能にしていた条件は、何よりも話者間の声が相互に聴取可能な距離の近接性であった。この近接性がいかなるものであったのかは、ジャワで行なわれていた地域住民たちによるロンダとよばれた夜警で、巡回を知らせる合図としてなぜ拍子木が用いられたのかを考えてみればよい。

以下に、ジャワ軍政当局が実施した農村実態調査の報告書から、ロンダと拍子木についての記述を示す。

まず、東部ジャワのマラン州マラン県での調査報告書では、ロンダの情景が次のように紹介されている。

各戸ヨリ、戸主二名宛ガ毎夜交替ニテ出動ス、但シ女戸主ノ家ハ當番日ニ五銭ノ現金ヲ拂イテ免除サル。事故アラバトン、（木鐘）ヲ連打シ、區民ニ知ラセ、カンボン内總出動ニテ事故現場ニ集合ス。（寺内 [1944]1995:49-50、下線は筆者）

次に、西ジャワのボゴール州スカブミ県での調査報告書には次のような説明がある。

夜10時ヨリ翌朝六時迄（ジャワ地方時）勤メ、ソノ間4、5回部落内ヲ巡視シ、直接或ハ間接盗難、火災及ビ風紀等ノ取締ヲナス。巡視中ハ絶ヘズ手堤鳴子板ヲ打ち鳴ラス。（上野 [1944]1995:234-235、下線は筆者）

この2つの記述から明らかなように、ロンダでは合図として比較的遠方にも音が達する拍子木が鳴らされたことがうかがえる。つまり、当時のジャワでは「声」とは唯一のコミュニケーション手段でありながら、話者間の距離の近接性によってのみ成立し、かつ、一過性で再現不可能な媒体であった。

このような、もっぱら人びとの間の直接的なオラリティによって成立していたジャワの人びとのコミュニケーションに、「うたを歌う木」の出現はいかなる影響を与えたのだろうか。町田は、「うたを歌う木」について、以下のように回想している。

（前略）村の広場にラジオ塔を設置して活用した。戦前にはなかった

このラジオ塔は、現地人に「声の鳴る木」と呼ばれて、大好評だった。
熱帯の夕暮れどき、その声や音楽を、広場に群れて聞く民衆の姿は、い
かにも楽しそうだった。(町田 1967: 219, 下線は筆者)

アラン・コルバンは、19世紀のフランスの教会の鐘の音が地域社会に聴覚空間、「音の風景」を誕生させ、共同体のアイデンティティが醸成されていったことをあつづけている (Corbin 1994=1997)。また、齋藤桂は、アラン・コルバンの議論を援用して、ラジオから流れる戦時下の時報や防空警報が日本の地域に「共同性をうみだす音風景」(齋藤 2017: 178-)をつくりあげたと述べている。同じ日、同じ時刻に同じ音・番組がながれる共時性は、聴衆のなかに共同体的な感覚をつくりあげていったと考えられる。

ジャワ軍政当局は、ラジオ塔を意識的に「カンボン、パッサル等民衆の集合し易い地点」(ジャワ新聞社 1944: 174)に建設した。アラン・コルバンと齋藤の議論を本稿に引きよせていえば、ラジオ塔の建設によってジャワ各地の地域社会にも、ラジオ受信機から流れる音声を媒介とする「音の風景」が現出し、そこに集う人々の新しい社会的動線がつくられたといえる。

むろん、ラジオ塔が建設される以前にも、ジャワの人びとのあいだで社交の機会は存在した。ここで再度、ロンダに注目してみよう。ロンダは、夜警以外にも地域社会における社交や情報交換としての機能も担っていたからである。西ジャワのボゴール州スカブミ県を調査した上野福男は、ロンダが行なわれる光景を次のように描写している。

ロンダハ一面夜間ノ涼味アル間男子多数参集シ語り明カス一種ノ社交場
タルノ観アリ。話尽クレバサロンニ身ヲ包ミテ睡ヲ得ル氣候ナレバ、内地ニ於ケル寒中夜警トハ大イニソノ趣ヲ異ニス。平穩ニシテ楽シキ勤務ト称シテ可ナラン。(上野 [1944]1995:234-235, 下線は筆者)

「一種ノ社交場タルノ観アリ」や「平穩ニシテ楽シキ勤務」という上野の

描写からは、ロンダが近隣社会のおもに男性住民間の情報交換や社交の場としても機能していたことがうかがえる。

上野の報告から、ロンダがジャワの地域社会で、おもに成人男性間の社交の機会をつくりだしていたことはほぼ間違いないと考えられる¹⁷。しかし、それが、話者間のオラリティを前提とするコミュニケーションによって成立していたことには変わりがない。また、ロンダは基本的に農村社会での社会慣行であり、都市ではあまりみることができなかった。さらに、夜警という性格上、参加者の大部分は成人男性であり、女性や子供たちの関与はほとんどなかった。したがって、ロンダによる社交の範囲はおのずと限定される。それに対して、ラジオ塔から流れる音声を媒介とする音の風景は、必ずしも成人男性に限らない幅広い社会層の人びとの社交の機会を提供することを可能にした。

図4：ラジオ塔周辺に集うジャワの地域住民



出典：『ジャワ・バル』1945年7月15日号、p.8より転載。

図4は、放送管理局の職員・ストモの「ラジオと国民」(Radio dan Masjarakat)と題する論説が『ジャワ・バル』誌に掲載されたときに付された写真である(『ジャワ・バル』1945年7月15日号)。写真には、ラジオ塔のもとに、年齢や性別が異なるジャワの住民たちが集う光景が写っている。

この写真が示唆するものは、2点である。1つは、ラジオ塔を結節点とする人びとのコミュニケーションの場が新たに生まれたことである。そして、2つは、さまざまな社会層に属する人びとが、娯楽を求めて「うたを歌う木」の周囲に集い、従前には存在しなかった話者間のみのオラリティを越えた新しいコミュニケーションを実践したと考えられることである。

軍政下の厳しい放送やラジオ受信機の管理の一方で、「うたを歌う木」が可能にしたラジオ鑑賞という希少な娯楽は、プロパガンダという「権力の音」を通奏低音としながらも、ジャワの社会に新しいコミュニケーションの場と機会をつくりだしたのである

図5：ラジオ塔（左端）から流れるインドネシア独立承認のニュースを聞く住民たち



出典：『ジャワ・パル』1944年9月15日号，pp.22-23より転載。

6. 結論

日本占領期ジャワにおける放送管理は、防諜のために段階的にラジオ受信機の管理を強化した。そして、最終的にはラジオの所有を著しく制限し、事実上、これを没収することで外国放送の受信を徹底的に排除し、情報の統制をはかった。しかし、これらの厳しい放送管理を実施する一方で、ジャワの軍政当局は「うたを歌う木」とよばれたラジオ塔を住民たちが多く集う場所

に建設し、報道のほか、教養や慰安を目的とする番組を編成し、放送した。この共同聴取という形でのラジオの普及は、外国放送や敵性放送の受信をあらかじめ排除することを担保しながら、希少な娯楽を住民たちに提供することを可能にした。この結果、ジャワの住民たちは、蘭領東インド時代の日常生活のなかでほとんどふれたことのないラジオから流れてくる「音」と「声」を、頻繁に聴取する機会を得た。

オラリティとリテラシィにみる人間の心性の相違を論じたウォルター・オングは、オラリティが、人びとのあいだに集合性、一体性、共同性をつくりだしてきたと述べている（Ong 1982=1991: 157）。ラジオ塔から流れてくる「音」と「声」に住民たちは娯楽を求めて集った。この同じ時間に、同じ「音」と「声」に耳を傾ける住民たちの共時的な実践は、従来にはない新しいコミュニケーションの可能性を開いた。それは、ラジオの「音」と「声」が媒介する住民のあいだのコミュニケーションである。

日本占領期ジャワにおけるラジオ受信機の厳格な管理と、ラジオ塔の建設による放送の普及という「声の占領」は、ジャワの各地で帝国を表象するアイコンをうみだした。それは、「うたを歌う木」とよばれたラジオ塔と、ラジオの「音」と「声」が媒介する新しいオラリティによるコミュニケーションである。前者は可視的であり、後者は不可視的である。ジャワ軍政当局による、両者の位相の異なる帝国を表象するアイコンは、近代的な音響メディアであるラジオ技術を十全に駆使できる学知をもつ帝国の「声の占領」によってつくりあげられたのである。

ジョナサン・スターンは、音響メディアの研究では、聴覚は視覚と比較して近代性のなかで無視されてきた感覚であったと述べている（Stern 2002=2015: 15）。しかし、本稿でみてきたように、ラジオから流れた「音」と「声」という聴覚は、たしかにジャワの人びとに帝国のアイコンを提示した。今後は、このスターンの指摘を導きの糸として、日本占領期のジャワにおける放送政策だけでなく、じっさいに放送されたラジオ音源を「テキストの外部の文脈」（小林 2009 :86）に注意を払いながら分析することを課題としてあ

げたい。

(謝辞)

宣伝映画 “Kesehatan Badan” (『身体の健康』) のキャプチャ画像の本稿への転載は、同映像の著作権者であるオランダ国立視聴覚研究所 (The Netherlands Institute for Sound and Vision) より許諾を得た。ここに記して深く感謝申し上げたい。

注

- 1 植民地期の朝鮮におけるラジオ聴取者については金の研究がある (金 2006)。
- 2 日本軍政当局が制作したプロパガンダ映画については、倉沢愛子の周到な研究がある (Kurasawa 1987; 倉沢 1989, 1992, 2009)。
- 3 ジャワにおけるアマチュア放送局については、ヘリー・マルディアントとアントニウス・ダルマントの共著に詳しい (Mardianto and Darmanto 2001)。
- 4 図1は、日本のジャワ軍政が開始されて間もない時期の住所録に掲載された広告である。ラジオ相談所は、日本国内のラジオ相談所指定規程およびラジオ技術者検定規程によって営業を許可された。日本では、時局にともなってラジオ施設が激増し、ラジオ業界による保守サービス態勢を強化する必要に迫られていた。指定店は「日本放送協会指定ラジオ相談所」の標札を掲示することが許された。本広告の「スーパーラジオ相談所」は、記載されている住所から、バタビアのスネンで営業していたと思われる。オウムとラジオのイラストとともに「ラジオに欠かせないあなたのお店。100 パーセント満足」とのキャッチコピーがインドネシア語で添えられている。
- 5 同要領によれば、まず、第一次としておもに海外・対敵・対内放送のために、1942年10月末までにシンガポールに50kW短波、マニラに10kW短波、ラングーンに10kW短波の放送施設の建設が計画された。次いで、第二次としておもに占領地の住民と局地放送のために、1943年2月末までに、シンガポールに10kW中波、マニラに10kW中波、ラングーンに10kW中波の放送施設の建設が計画された。さらに、第三次として、第一次、第二次建設計画後に、小電力の中波と短波によるおもに占領地の住民と連絡用のための放送施設の建設も計画されている。同要領にインドネシアの放送施設の計画が示されていない理由は、当地では戦争による既存施設の破壊が少なかったため、新しい放送施設の建設は不要であり、戦争前の原状回復が妥当と判断されたためであった (陸軍省報道部 1942)。
- 6 各放送管理局の概要については、佐藤の論考を参照 (佐藤 1975)。

- 7 島浦ほかジャワ各地の放送管理局の職員の氏名・役職は、佐藤勝造の論文を参照(佐藤 1974)。また、島浦の名前は、爪哇軍政監部が発行していた電話番号簿(爪哇軍政監部 1943: 33)からも確認できる。
- 8 高名な馬來語学者の宮武正道も、ラジオ受信機が短波放送を受信できるものであったため、戦前のインドネシアではベルリンや東京からの放送も受信することができ、インドネシア人知識層は東京からのオランダ語放送だけでなく、台北からのマレー語ニュースを聴いていたと述べている(宮武 1942: 22)。
- 9 この段階では、ラジオ受信機の放送波長帯をふくむ受信機の波長帯のみに波長切替スイッチを固定する封印を施した(ジャワ新聞社 1944: 174)。アラブ系インドネシア人の有力者で、戦後、インドネシア共和国情報副大臣を務めたアブドゥルラフマン・バスウェダンは、所有していたラジオの封印を破ったため、外国放送を傍受していたと憲兵隊に疑われた。このためバスウェダンは、ジャワ奉公会中央本部長のスカルノに助力を求め逮捕を免れたと、バスウェダンの夫人が証言している(Arsip Nasional Republik Indonesia 1988: 29-30)。
- 10 同様の処置は、ジョグジャカルタでも実施された(KAN PO No.7: 19)
- 11 例外は以下であった(治官報第5号:4)。
 1. 放送聴取無線電話の受信機ニシテ周波数 3,000「キロサイクル」(1,000メートル)乃至 550「キロサイクル」(545.4メートル)ノ範囲ニ限り受信シ得ルモノ。
 2. 軍事上ノ用ニ供スルモノ。
 3. 軍政監ニ於テ指定又ハ許可シタルモノ。
- 12 ジャワ放送管理局長の苦米地貢は、航空戦の苛烈化にともなう電波兵器の必要性について論じている(苦米地 1945)。苦米地は、日本放送教会の設立に携わった1人で、当時の日本を代表する無線技術の専門家であった。無線通信機器とその部品の管理が強化された理由は、来るべき電波兵器戦に備えた措置ともみることができる。
- 13 放送局がある地域では、放送局でも登録が可能とされた(治官報第8号:56)。
- 14 池山は当時の戦況を「皇国浮沈の瀬戸際」(池山 1944: 59)と述べている。池山のこの文章が掲載されたのは1944年12月であった。このことから、防諜を推進する当局者の池山本人も、この段階ですでに日本の敗色が濃厚であったことを認識していたとみてよいだろう。
- 15 本原資料には実名が記載されているが、本稿では匿名とする。本史料には判決の年月日の記載がないため、いつの段階で判決がなされたのかを特定することはできない。しかし、本史料は、ラジオ「犯罪」を犯した者がじっさいに逮捕されて判決を受け、刑務所に収容されたことについては証明できるものである。さらに、別の史料では、造言蜚語と敵国放送傍受の罪名で無期懲役の判決を受け、バンドゥンのスカミスキン刑務所に収容されたユダヤ人があることも確認できる(NIOD 400-4626)。

- 16 バタビアにおける 40 機のラジオ塔は 8 月 6 日に設置工事が完了した (『うなばら』1942.8.7)。
- 17 さらに、上野はジャワ新聞の記事でもロンダについて以下のように述べている。
ロンダは皆好んでやる。ルマ・ロンダで老人が色々昔語りをし、若者が傾聴しているなどは村の社交場としてほほえましい風景である。(『ジャワ新聞』1943 年 12 月 4 日)

[文献]

1. 公刊

(日本語)

- 秋山久, 2018, 『ラジオと戦争』旬報社。
- 後藤乾一, 2009, 「解題」『南方軍政関係資料 39 ジャワ占領軍政回顧録』龍溪書舎。
- 井川充雄, 2012, 「VOA フォーラム——『教養番組』とプロパガンダの交差するところ」土屋由香・吉見
- 俊哉編, 『占領する眼・占領する声——CIE / USIS 映画と VOA ラジオ』東京大学出版会。
- 池田靖, 1944, 「謀略と防諜」『新ジャワ』1(3): 54-59。
- ジャワ新聞社 1944, 『ジャワ年鑑(昭和 19 年) 紀元二千六百四年』(= 1973 [復刻版], 『ジャワ年鑑(昭和 19 年) 紀元二千六百四年』ビブリオ)。
- 貴志俊彦, 2006, 「東アジアにおける『電波戦争』の諸相」貴志俊彦・川島真・孫安石編『戦争ラジオ 記憶』勉誠出版, 35-56。
- 北山節郎, 1987, 『ラジオ・トウキョウ—戦時体制下 日本の対外放送 I 真珠湾への道』田畑書店。
- , 1988a, 『ラジオ・トウキョウ—戦時体制下 日本の対外放送 II 「大東亜」への道』田畑書店。
- , 1988b, 『ラジオ・トウキョウ—戦時体制下 日本の対外放送 III 敗北への道』田畑書店。
- 金栄熙, 2006, 「植民地朝鮮におけるラジオ放送の出現と聴取者」貴志俊彦・川島真・孫安石編『戦争ラジオ 記憶』勉誠出版, 156-179。
- 小林多津子, 2009, 「声を聴くこととオーラリティの社会学的可能性」『社会学評論』60(1): 73-89。
- 倉沢愛子, 1989, 「日本軍政下のジャワにおける映画工作」『東南アジア——歴史と文化』18 号: 41-69。
- , 1992, 『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社。
- , 2009, 「宣伝メディアとしての映画——日本軍占領下のジャワにおける映画製作と上映」奥村賢
- 『日本映画史叢書 10 映画と戦争——撮る欲望／見る欲望』森話社: 93-137。

- 三好俊吉郎, 2009, 『南方軍政関係資料 39 ジャワ占領軍政回顧録』 龍溪書舎。
- 日本放送協会, 1943 『昭和十八年ラヂオ年鑑』 日本放送出版教会。
- 田子内進, 2006, 「植民地期インドネシアにおけるラジオ放送の開始と音楽文化——『NIROM の声』が描く音楽文化」『東南アジア研究』 44(2): 145-203.
- 朴美貞, 2016, 「まえがきに代えて」 朴美貞・長谷川怜暢 『日本帝国の表象—生成・記憶・継承』 えにし書房: 3-10。
- 町田敬二, 1967, 『戦う文化部隊』 原書房。
- 宮武正道, 1942, 『インドネシア人の文化』 大同書院。
- 齋藤桂, 2017, 『1933 年を聴く——戦前日本の音風景』 エヌティティ出版。
- 佐藤卓己, 2006, 「ラジオ文明とファシスト的公共性」 貴志俊彦・川島真・孫安石編 『戦争 ラジオ 記憶』 勉誠出版, 2-23.
- 佐藤勝造, 1974, 「爪哇(ジャワ)放送管理局のあゆみ (1)」『NNK 文研月報』 24(11): 31-38.
- , 1975 「爪哇(ジャワ)放送管理局のあゆみ (2)」『NNK 文研月報』 25(2): 39-48.
- 島浦精二, 1945, 「戦争と放送を語る」『新ジャワ』 2(1): 73-75。
- 竹山昭子, 1994, 『戦争と放送——史料が語る戦時下情報操作とプロパガンダ』 世界思想社。
- , 2002, 『ラジオの時代——ラジオは茶の間の主役だった』 世界思想社。
- , 2005, 『史料が語る太平洋戦争下の放送』 世界思想社。
- 寺内清彦, 1944, 「農村実態調査報告(マラン州マラン県, シンゴサリー郡カランプロソー村タシマドウ区)」 ジャワ軍政監部総務部資料調査室編 (= 1995 [復刻版], 倉沢愛子編・解題『南方軍政関係史料 17 農村実態調査 (ボゴール州・ジョグジャ州・マラン州)』 東京: 龍溪書舎.)
- 苦米地貢, 1945, 「航空決戦と電波兵器」『新ジャワ』 2(7): 48-52。
- 上野福男, 1944, 「農村実態調査報告 (ボゴール州スカブミ県, スカブミ郡チサート村チマヒ区)」 ジャワ軍政監部総務部資料調査室編 (= 1995 [復刻版], 倉沢愛子編・解題『南方軍政関係史料 17 復刻版農村実態調査 (ボゴール州・ジョグジャ州・マラン州)』 東京: 龍溪書舎.)
- 山本武利, 2002, 『ブラック・プロパガンダ——謀略のラジオ』 岩波書店。
- 吉見俊哉, 1995, 『「声」の資本主義——電話・ラジオ・蓄音機の社会史』 講談社。
- 渡辺考, 2014, 『プロパガンダ・ラジオ——日米電波戦争幻の録音テープ』 筑摩書房。

(外国語)

Arsip Nasional Republik Indonesia, 1988, *Di Bawah Pendudukan Jepang: Kenangan Empat Puluh Dua Orang yang Mengalaminya.*

Corbin, Alain, 1994, *Les Cloches de la Terre: Paysage Sonore et Culture Sensible Dans les Campagnes au XIXe Siècle*, Paris: Albin Michel. (= 1997, 小倉孝誠訳『音の風景』藤原書店)。

Kurasawa, Aiko, 1987, "Propaganda Media on Java under the Japanese 1942-1945." *Indonesia*: No.44:

Mardianto, Herry and Antonius Darmanto, 2001, *Tradisi Sastra Jawa Radio*, Yogyakarta: Kalika.

Ong, Walter J., 1982, *Orality and literacy: The Technologizing of the Word*, New York and London: Methuen. (= 1991, 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店)。

Samengesteld Door Het Centraal Kantoor Voor De Statistiek Van Het Departement Van Economischhe

Zaken, 1941, *Indisch Verslag 1941*.

Sterne, Jonathan, 2002, *The Audible Past: Cultural Origins of Sound Reproduction*, Durham: Duke University Press. (= 2015, 中川克志・金子智太郎・谷口文和訳『聞こえる過去——音響再生産の文化的起源』インスクリプト)。

United States, Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch (OSS), 1945, *Programs of Japan in Java and Bali, with Biographies*.

2. 未公開

旧慣制度調査委員会, 『旧慣制度調査委員会議事録』(戸田金一復刻『日本軍政下インドネシア 旧慣制度調査委員会議事録 全二分冊の一』)

3. 公文書 (所蔵機関別)

オランダ国立戦争・ホロコースト・ジェノサイド研究所 (NIOD)

爪哇軍政監部, 1943, 『秘・軍政監部電話番号簿 昭和十八年八月現在』

「政治犯収容者リスト」 n/d (NIOD 400-4626)

オランダ国立視聴覚研究所 (The Netherlands Institute for Sound and Vision)

日本映画社ジャカルタ支社, 1945, "Kesehatan Badan" (『身体の健康』) Task ID No.119685.

ライデン大学附属図書館

爪哇軍政監部, 1944, 『爪哇軍政監部規程類聚 (編成) 軍政監部本部分課規程 昭和一九年一月一日現在』

Kantor Penjajaran Partikoelir, n/d, *Boekoe Alamat Pertama Teristimewa oentoek Djakarta dan Djatinegara*.

IACAR（国立公文書館 アジア歴史資料センター）

工務局調査課, 1938, 『蘭領東印度の無線放送』（Ref. A09050659600）

南方軍総司令部, 1942, 『極秘 昭和 17 年 3 月 10 日 対「ジャヴァ」謀略放送実施経過報告』（Ref. C14110646300）

整備局交通課, 1942, 『南方占領地放送暫定処理要領』（Ref. C01000351200）

陸軍省報道部, 1942, 『南方占領地放送施設建設要領』（Ref. C01000472200）

4. 新聞

うなばら

ジャワ新聞

5. 雑誌

（日本語）

『国際時報』

『ジャワ・バル』[1943-45]（復刻版 1992）倉沢愛子解題．東京：龍溪書舎。

『新ジャワ』[1944-45]（復刻版 1990）倉沢愛子解題．東京：龍溪書舎。

（インドネシア語）

Poestaka Radio

6. 法令集

治官報・Kan Po [1942-45]（復刻版 1989）倉沢愛子編解題．東京：龍溪書舎。

